論　文

大学院生等を対象とした大学教員養成プログラム（プレFD）の動向と東北大学における取組み

今野文子[1)*]

1）東北大学　高度教養教育・学生支援機構

1．はじめに

大学院生らを対象とした大学教員養成機能は「プレFD」とも呼ばれ，研究大学を中心にさまざまな取組みが行われている．2008年の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』において「生涯を通じた職能開発を考える上では，（中略）大学教員となる前の段階，大学院における大学教員の養成機能（いわばプレFD）の在り方を見直すことが必要である．各大学院において意図的・組織的にプレFDがなされなければ，ユニバーサル段階の大学教員となるべき備えはできない」との指摘がなされ，「教育研究上の目的に応じて大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」ことが具体的な方策として示された．これに前後して，2015年に至るまで，毎年のように新しい取組みが生まれてきた．

本稿では，今後のプレFDの発展と，後続の取組みを開発する上での基礎資料として寄与すべく，現在，日本国内で実施されている主なプレFDについて，文献，ウェブサイト上で公表されているデータや資料，担当者へのメールおよび電話取材などで得られた情報をもとに，それらの形態や内容を整理する．また，東北大学の取組みと成果をふまえたうえで，今後の課題についてまとめる．

2．プログラムのルーツと性格

大学院生やポスドクに対する大学教員養成の取組みが最も盛んなのは，米国である（田口ら，2013）．1993年，大学院協議会（Council of Graduate Schools: CGS）とアメリカ大学カレッジ教会（Association of American Colleges and Universities: AAC&U）による共同事業として，大学教員としてのキャリアを歩む大学院生やポスドク対象のPFF（Preparing Future Faculty）プログラムが開始された．その後，プログラムのモデルの開発，各大学での実践・普及，自然科学・数学分野でのモデル開発，人文・社会科学分野でのモデル開発，という段階をたどりながら展開していった．このCGSとAAC&UのPFFプログラムは2002年に終了しているが，これを原型としながら，米国の各大学がそれぞれ大学教員養成の取組みを継続しているといえる（田口ら，2013）．

一方，日本で最も早くプレFDを始めたのは，広島大学である．広島大学高等教育研究開発センターが1999年に開いた「アカデミック・キャリアゼミ」は，大学院では研究に専念するように訓練しているのに，教員になったとたんに教授能力を求めるのは本末転倒だ，との考えから，大学院生向けに大学教員としての基礎知識を扱うゼミとして開講された．社会科学研究科で２単位の講義として，①高等教育研究が専門のセンター教員と他研究科の教員の講義を組み合わせること（リレー講義形式），②授業参観を行うこと，③実践的知識と大学論を組み合わせること，④参加者の討議を重視すること，に留意して設計された．しかしながら，参加者数の減少等の理由で，４年間にわたる実践の後，継続されるまでには至らなかった（羽田，2008）．

日本におけるプレFDには，広島大学のアカデミック・キャリアゼミのような「FDの一部としての取組み」と，それとは別の「TA（Teaching Assistant）制度の実質化」という２つのルーツがあるといわれている（田口ら，

*）連絡先：〒980－8576　宮城県仙台市青葉区川内41　東北大学高度教養教育・学生支援機構　fumiko@m.tohoku.ac.jp

表１　日本国内の主なプレFDの取組み

大学名	名称	開始年	形態
北海道大学	大学院生のための大学教員養成講座（英語版PFF）	2010	大学院授業開講型 （大学院共通授業科目）
	高等理学教授法（日本語版PFF）	2010	大学院授業開講型 （大学院理工系専門基礎科目）
	TF制度	2015	TF制度型
東北大学	東北大学 大学教員準備プログラム （Tohoku U. PFFP）	2010	課外プログラム型
筑波大学	TF制度	2008	TF制度型
	職業としての大学教育	2008	大学院授業開講型 （大学院共通科目）
	PFPプログラム	2013	大学院授業開講型 （大学院共通科目等）
一橋大学	ティーチングフェロープログラム	2006	TF制度型 （単位認定あり）
東京大学	東京大学フューチャーファカルティプログラム（FFP）	2013	大学院授業開講型 （大学院共通科目）
名古屋大学	大学教員準備プログラム	2005	大学院授業開講型 （大学院共通科目）
京都大学	大学院生のための教育実践講座―大学でどう教えるか―	2005	課外プログラム型
	文学研究科プレFDプロジェクト	2009	課外プログラム型
	大学で教えるということ	2012	大学院授業開講型 （研究科横断型教育プログラム）
	コンソーシアム京都との連携による文学部単位互換リレー講義	2015	課外プログラム型
立命館大学	Preparing Future Faculty （大学教員準備セミナー）	2011	課外プログラム型
大阪大学	大阪大学 未来の大学教員養成プログラム	2014	大学院授業開講型 （大学院等高度副プログラム）
大阪市立大学	大学教育授業実習制度	2011	課外プログラム型
広島大学	教職課程担当教員養成プログラム	2007	大学院授業開講型 （大学院専門的教育科目）

2013；東北大学高度教養教育・学生支援機構，2015）．加えて，プレFDには「大学院生のキャリア支援」と「大学院教育改革」の２つの側面があることが指摘されている（東北大学高度教養教育・学生支援機構，2015）．よりキャリア支援的性格が強いのは，オーバードクターへの支援を目的とした京都大学の取組み（田口ら，2013）をはじめとして，名古屋大学，一橋大学，筑波大学などがある．一方，より大学院教育改革としての志向が強いのは，教職担当教員養成を明確に掲げている広島大学の取組み（教職課程担当教員養成プログラム）である（東北大学高度教養教育・学生支援機構，2015）．

３．プログラムの形態

2015年時点において継続的に実施されており，その内容等を公表している国内のプレFDの主な事例を表１に大学別に示す．これらは，その実施主体，形態に基づき，大学院において授業として単位認定をともなうかたちで開講されている「大学院授業開講型」，授業外の個別のプログラムとして実施されている「課外プログラム型」，TF制度の展開とともに必要な訓練の機会を提供する「TF制度型」の３つのタイプに整理することができる．

件数としては，大学院授業開講型が最も多く９件，次に課外プログラム型が６件，TF制度型が３件となっている。中には，課外プログラム型で実施されていたものが，後に集中講義として単位を認定するようになり，大学院授業開講型となった事例もある．

４．日本国内における事例

プレFDの取組みは，その内容や提供方法にそれぞれの大学が置かれている状況や実践者の専門性などが色濃く反映されており，多様である．それぞれの事例について，以下，取組みの形態ごとに示す．

4.1　大学院授業開講型の事例

大学院授業開講型の事例を表２に示す。

北海道大学では，英語版PFFと呼ばれる集中講義「大学院生のための大学教員養成講座」と，日本語版PFF

表２　大学院授業開講型の事例[1]

大学名	北海道大学		筑波大学		東京大学	名古屋大学	大阪大学	京都大学	広島大学
名称	大学院生のための大学教員養成講座（英語版PFF）	高等理学教授法（教育力養成講座）（日本語版PFF）	職業としての大学教育	PFPプログラム	東京大学フューチャーファカルティプログラム（FFP）	大学教員準備プログラム	大阪大学 未来の大学教員養成プログラム	大学で教えるということ	教職課程担当教員養成プログラム
開始年	2010年	2010年	2008年	2013年	2013年	2005年	2014年	2012年	2007年
実施主体	高等教育推進機構	理学院	人文社会科学研究科	PFP実施委員会	大学総合教育研究センター	高等教育研究センター	教育学習支援センター	高等教育研究開発推進センター	教育学研究科
対象	学内正規大学院生のうち，修士２年目，博士課程後期の学生	学内正規大学院生（全大学院から受講可）	大学院生	人文社会科学研究科所属の博士課程，修士課程在籍者	学内正規大学院生	大学院生，ポスドク，科目等履修生	大学院生	大学院生	教育学研究科の博士課程後期の大学院生
期間	５日間（15講座）の集中講義	半期（15回）	３日間の集中講義	数年	半期（前／後期それぞれ開講）	３日間の集中講義	それぞれの授業は半期	３日間の集中講義	３年間
特色	UCバークレーの教員による英語でのワークショップ，ティーチングの基礎，授業のシラバスと学習目標の設計，評価基準の作成と活用，大人数授業の運営方法，職務規定と教育倫理，アカデミック・ライティングの基礎，学会発表申込，国際学会誌への論文投稿，論文要旨執筆方法，論文の推敲・校閲について学ぶ	週一コマ，理学院での開講であるが，全大学院から受講可能，ティーチングの基礎，授業のシラバスと学習目標の設計，評価基準の作成と活用，大人数授業の運営方法，職務規定と教育倫理，アクティブ・ラーニング入門，eラーニング入門，クリッカーの使い方，論文抄録の書き方，申請書の書き方などについて学ぶ	シラバス作成，アクティブ・ラーニング，eラーニング，ディスカッション指導の方法，教育プロジェクト作成，日本語論文指導の方法，模擬授業など大学教員としての技法を実習するとともに，TA制度やPFF，教養教育，教育改革，など，今日の日本の大学教育が直面する諸課題を扱う	前期～後期課程をまたがっての履修可，大学等教員養成支援コースの必修科目には，キャリアデザイン論，グラントライティング入門，「職業としての大学教育」が含まれる，選択科目は，科学技術・学術政策概論，教師論，仕事と生活，博士のキャリアパス，研究倫理，情報コミュニケーション論，プレゼンバトルなど	隔週２コマ連続の授業「大学教育開発論」とプレ／ポストワークショップにより，高等教育の現状，学習科学，アクティブ・ラーニング，クラスデザイン，シラバス作成，評価，マイクロティーチング，アカデミック・ポートフォリオの作成に取組む，教員募集情報をプログラム修了生に配信する取組みも実施	大学教員という職業，大学教員のライフコース，授業設計，教授法の基礎，学習成果の評価，マイクロティーチング，国際化，研究マネジメント，社会サービス，倫理，書く能力を学生につける，学生のキャリア形成支援，多様な高等教育機関，大学教員のライフコースなどを扱う，「大学教員準備講座」という教科書を刊行	「大学授業開発論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ(必修)」「学術的文章の作法とその指導(選択)」「現代キャリアデザイン特論（選択）」からなる，必修科目では，授業デザインと基本的な教育技法に関わる知識学習，マイクロティーチング，ルーブリック作成，教育の抱負作成，授業参観／実践，アカデミック・ポートフォリオ作成に取組む	参加者同士の議論を中心に展開，世界の大学教育改革の動向，大学授業のデザイン（講義），全体ディスカッション，授業デザインワークシートの作成，大学における授業改善，演劇ワークショップ，模擬授業のデザイン・実践，検討会からなる	1年次:「教員養成学講究」（２単位）と「大学教授学講究」（２単位）を履修し，教員養成制度の歴史や国際比較，シラバスの作成，大学教育論，大学の教授法に関する課題について学ぶ，２年次:学内での教壇実習（２回），３年次：他大学での実習，教職教育ポートフォリオの作成を通して自身の教育哲学をまとめる
実績	平均年間修了者数30名	平均年間修了者数10名			平均年間修了者数96.5名	平均年間修了者12名	2014年は計34名が受講	例年10名程度が受講	2014年度までに13名が修了
単位認定	大学院共通授業科目として２単位認定	大学院理工系専門基礎科目として２単位認定	大学院共通科目として１単位認定	大学院共通科目，およびIFERI科目として認定	大学院共通科目として２単位認定	大学院共通科目「大学教員論」として２単位認定	大学院高度副プログラムとしてそれぞれ２単位，単独受講可	研究科横断型教育プログラムの授業科目として２単位認定	１年次に履修する授業は専門的教育科目としてそれぞれ２単位
修了証	あり	なし	なし	あり	あり	なし	あり	なし	あり

「高等理学教授法」を提供している．英語版PFFは，カリフォルニア大学バークレー校から現地の教員を招聘し，英語でワークショップを行うもので，受講生のおよそ半数は留学生であるという（北海道大学 高等教育推進機構，2015a；北海道大学，2015；細川，2015）

筑波大学では，大学院共通科目（キャリアマネジメント科目群）として「職業としての大学教育」を開講しており，この授業の受講により，就職活動の際には教育の抱負やサンプル・シラバスの提出，あるいは模擬授業に自信を持って望むことができると紹介されている（筑波大学，2015）．また，人文社会科学研究科に在籍する大学院生を対象としたPFP（Preparing Future Professors/Professionals）プログラムが2013年から提供されている．本プログラムでは，専攻の研究指導で磨かれる以外の汎用的な力を身につけることを目的に，①大学等教員養成支援コースと②高度専門職業人養成支援コースが設けられており，各コースの必要単位（共通必修科目１単位，選択科目５単位以上，コース必修科目２単位，コース実習科目２単位以上）を取得すると認定証の申請資格が得られる．大学教員養成支援コースの必修科目には，先述の「職業としての大学教育」が含まれている（筑波大学，2014）．

東京大学では，「東京大学フューチャーファカルティプログラム（FFP）」を提供している．実践的な活動を通して教育力を高め，多様な専門領域間のネットワークをつくることを目的としており，プログラム修了後のアラムナイ活動や，MOOC講座への展開，SNSの活用，修了生のリクルート窓口の設置など，多角的なアプローチで大学教員へのキャリア支援を充実させている（東京大学，2015a，2015b；栗田，2015）．

名古屋大学では，「大学教員準備プログラム」を夏季に３日間の集中講義として実施しており，2009年からは近隣の大学の院生も受け入れている．2010年度から教育発達科学研究科の正規科目として単位が認定されるようになり，2012年度から教養教育院大学院共通科目「大学教員論」として２単位が認定されている．これらの内容は2010年３月に『大学教員準備講座』（玉川大学出版部）として出版され，本講座の教科書として利用されている（夏目，2011；名古屋大学 高等教育研究センター，2015）．

大阪大学では，「未来の大学教員養成プログラム」を実施しており，大阪大学が学際融合教育の一環として主専攻の教育課程以外の内容や関連分野の学びを促進するために提供している「大学院等高度副プログラム」として位置づけられている（大阪大学 全学教育推進機構，2015）．５つの科目が提供されており，必修科目として「大学授業開発論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」，選択科目として「学術的文章の作法とその指導（ライティング指導のトレーニング）」，「現代キャリアデザイン特論（大学院生向けのキャリアデザインの方法と実践）」がそれぞれ２単位で開講されている．このうち８単位以上の取得で修了証が発行される（大阪大学 教育学習支援センター，2015；佐藤，2015）．

京都大学では，研究科横断型教育プログラムにおいて「大学で教えるということ」を開講している（京都大学 高等教育研究開発推進センター，2015）．研究科横断型教育プログラムとは，京都大学において大学院生が広い視野を持ち，新しい学問領域を創造できるような能力を備えるために，所属研究科の高度な専門教育に加えて，研究科を横断して実施される教育プログラムが有効との考えから設置されたものである（京都大学，2015a）．キャリア・社会実装・イノベーション科目群に位置づけられ，３日間の集中講義として実施されている（京都大学，2015b，2015c）．

広島大学大学院教育学研究科では，2007～2009年度にかけて，文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」採択事業として開発した「Ed.D型大学院プログラム」を引き継ぎ，2010年度からは「教職課程担当教員養成プログラム」としてさらに発展させて提供している（丸山，2012）．本プログラムでは，将来的に教員養成に携わる博士課程後期の学生を対象とした「先生の先生」になるための実践的力量の養成を目指し，博士課程後期の３年間を通して講義，教壇実習および事前／事後検討会，研究発表などを継続的に体験し，自身の実践に関する技能や知識を培う（広島大学，2015）．また，本プログラムの受講生を中心とした共同研究にも取組み，大学教育研究フォーラム等で研究発表を行っている（森下，2014；境ら，2014）．

4.2　課外プログラム型の事例

課外プログラム型の事例を表３に示す．

表３　課外プログラム型のプレFDの事例 (1)

大学名	東北大学	京都大学			立命館大学	大阪市立大学
名称	東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）	大学院生のための教育実践講座―大学でどう教えるか―	文学研究科プレFDプロジェクト	コンソーシアム京都との連携による文学部単位互換リレー講義	Preparing Future Faculty（大学教員準備セミナー）	大学教育授業実習制度
開始年	2010年	2005年	2009年	2015年	2011年	2011年
実施主体	高度教養教育・学生支援機構	主催：FD研究検討委員会，共催：高等教育研究開発推進センター	FD研究検討委員会，文学研究科と高等教育研究開発推進センターが連携	高等教育研究開発推進センターと大学コンソーシアム京都との連携	大学院キャリアパス推進室	文学研究科の依頼で大学教育研究センターの教員が講師を担当
対象	博士課程後期の大学院生，ポスドク	大学院生，オーバードクター，ポスドク，研究員	文学研究科のオーバードクター	文学研究科プレFDプロジェクト修了生	大学院生，ポストドクター	ポストドクター
期間	８カ月	1日間	半期	半期	オンデマンド講義＋ワークショップ（２日間）	半期
内容	日本の高等教育に関する講義，教授学習に関する講義，シラバス作成，授業参観（学内／学外），マイクロティーチング，模擬授業，研究指導に関するワークショップ，先輩教員によるコンサルテーション，リフレクティブ・ジャーナルの執筆などを通して，自己省察力を身につけ，自身の教育観を言語化することが目標として挙げられている，オプションで海外／国内他大学訪問を提供，新任教員向けプログラムと合同で実施	毎年８月上旬に丸一日のワークショップとして実施，大学教員へと自己形成していくきっかけとなる場を提供することを目的とする，大学授業の現在と未来（講義），演劇でコミュニケーションデザイン，大学授業の現場から見たプレFD（講義），大学の授業をどう思うか（グループ討論），大学の授業で教師に求められるもの（グループ討論），大学で教えるために（全体討論）など	学期始めに事前研修会：プログラムの趣旨および目的の説明，授業デザインについての講義，学部１，２回生を対象とした入門的な講義を前期・後期各15回ずつをリレー講義の形式で担当，毎回の授業終了後に20～60分程度の授業検討会を実施，ワークシートを用いた授業デザインや，授業ビデオを用いたふり返りを実施する，後期の授業終了後には事後研修会：教育活動の課題や，授業手法についてグループディスカッション	半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼をおいた活動として，他大学の学生も対象とした魅力的な単位互換授業を開講する	オンデマンド講義で「教育方法論」「高等教育論」（現代の高等教育改革，高等教育で用いられる授業技術とその事例，大学における授業の問題点と双方向授業，青年期の心理）を受講し，レポート課題を提出，教育開発推進機構の教員が担当する授業の見学を通じて，オンデマンド講義の内容に対する理解を深める，ワークショップでは，授業設計，マイクロティーチング，ルーブリック評価等について個人／グループワークを組み合わせて学ぶ	合同事前FD研修：教育課程の特徴，大学に期待される学び，シラバスの意義と作成，ラーニングアウトカム，単位の実質化，授業案作成のポイント，授業方法とその目的（90分），科目担当教員の授業の見学，３回の授業実践（科目担当教員による事前事後指導），他の研修生による授業の参観（２回以上），科目担当教員の授業見学，合同事後FD研修：ふり返り，相互助言，大学教員のあり方に関する討論（90分），大学論・大学教育論FDセミナー（90分）への参加
実績	2014年度までに47名が修了	例年30～50名程度が参加	2012年度までに119名が修了		2015年度までに57名が修了	2013年度までに８名が修了
修了証	あり	あり	あり	なし	あり	あり

東北大学では，文部科学省の教育関係共同利用拠点事業[2]として,「大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP)」を開発・提供している．新任教員を対象としたプログラムと合同で実施されており，大学院生と初期キャリアの教員がともに学びあう体制で運営されている．オプションとして，国内他大学および海外他大学の調査訪問も実施されており，授業参観や現地の教員らとの討議により，比較の視点を養う機会が提供されている（東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015；東北大学 大学教育支援センター，2015).

京都大学は，課外プログラム型の取組みを３つ実施している．まず一つ目は，FD検討委員会主催による「大学院生のための教育実践講座―大学でどう教えるか―」である．全学の大学院生を対象としており，2008年からは，講座修了生からの要望を受けて，より発展的な内容を扱うアドバンストコースの提供を開始したが（京都大学 高等教育研究開発推進センター，2015)，2015年から後述の研究科横断型教育プログラムに吸収されることになった．二つ目は,「文学研究科プレFDプロジェクト」である．文学研究科のオーバードクターを対象とし，実際の教壇にたつ経験を核とした取組みである．2009年度から全学組織であるFD研究検討委員会が実施者となり，文学研究科と高等教育研究開発推進センターが連携して取り組んでいる（田口ら，2010)．受講者は文学部の非常勤講師として雇用され，学部生向けの講義をリレー形式で一人当たり２～５回担当する（田口ら，2013，京都大学 高等教育研究開発推進センター，2015)．三つ目の取組みは,「コンソーシアム京都との連携による文学部単位互換リレー講義」である．半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼をおいた活動として,「文学研究科プレFDプロジェクト」の修了生が大学コンソーシアム京都との連携により，京都大学以外の学生も対象とした単位互換授業を提供する．2015年度に開始された新しいプログラムであり，今後の展開が期待される（京都大学 高等教育研究開発推進センター，2015).

立命館大学では，オンデマンド講義，授業見学会，２日間のワークショップからなる「Preparing Future Faculty（大学教員準備セミナー)」を提供している．オンデマンド講義は，新任教員対象実践的FDプログラムにおいて提供しているものから，大学院生向けに選択して提供している．（林ら，2013；立命館大学 大学院キャリアパス推進室，2015).

大阪市立大学では,「大学教育授業実習制度」を実施している．大学教員を目指すポスドク等に対してプレFDを行い，その一環として文学部専門科目の一部を非常勤講師として実習させることにより，大学教員としてのキャリア形成をはかることを目的としている（飯吉，2015)．この制度では，専任教員の担当授業の一部（３コマ）を実習生に割り振り，教員の指導の下で実際に授業を担当することが特色である（北村ら，2012；三上，2012).

4.3　TA制度型の事例

TA制度型の事例を表４に示す．

北海道大学では，2015年度から，大学院生に大学院教育の一環として教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで，教育能力を高め将来指導的役割を果たす人材を養成すること，また，これにより学士課程教育をより一層充実させることを目的としてTF制度を導入している．TF は TA よりも業務内容が幅広く，教員の管理下において，講義や成績評価，教育内容を企画することができ，給与も多い．これらの職務に就くためには，TA経験，ならびにTF研修会への参加，あるいは先述の「大学院生のための大学教員養成講座」,「高等理学教授法」の単位修得のいずれかにより修了証を授与されていることが必要となる．また，授業参観，反省会に出席することが推奨されている（細川，2015;北海道大学 高等教育推進機構，2015b).

筑波大学では，TA－TF－TP（Teaching Professor）の３つのレベルから構成されるFDの組織化・制度化を指向し，未来型の大学人育成のためのFD活動を実践することを目的としてTF制度を設けている．「教育者としてのトレーニングの機会提供」をさらに強化し，博士後期課程の学生が，従来のTAとして行う授業補佐・援助に加えて，担当する授業の教育方法等の大学教員として必要な能力を身につけるとともに，大学教育及び授業の改善にも結びつけることを目指して

表４　TF制度型のプレFDの事例 (1)

大学名	北海道大学	筑波大学	一橋大学
名称	北海道大学 TF制度	筑波大学 TF制度	ティーチングフェロープログラム
開始年	2015年	2008年	2006年
実施 主体	高等教育 推進機構	各研究科	社会学研究科＋キャリア支援室 （大学院生担当）
対象	正規大学院生のうち，修士２年目，博士課程後期の学生	TA経験者の博士課程後期の学生	社会学研究科博士後期課程の大学院生（原則的にTA経験者）
期間			最短で一年間
特色	TF として採用されるためには，TA経験者であること，ならびにTF研修会：TFとしての心構えと教育倫理綱領の理解，シラバスの構成と意味，評価の機能と種類，クラス・マネージメント，アクティブ・ラーニング実習（年２回開催）への参加，あるいは「大学院生のための大学教員養成講座」，「高等理学教授法」の単位修得 のいずれかにより修了証を授与されていることが必要，また，授業参観（７月と12月に実施），反省会（２学期終了後に実施）に出席することが推奨されている	各研究科が採用条件とする研修へ参加することが必要（例：人間総合科学研究科では，外部講師による講演，学内教員のモデル授業，研究科の推薦するTF院生による「TF公開授業」などからなるFDプログラム（年４回開催）への参加を条件としている，FDプログラムには，TFになった院生以外にも，TFを目指す院生，各種研究員や教員も参加可能である）	①ガイダンス，②講習会Ａ（集中講義：シラバス作成，大学教員としての留意点），③授業参観（２コマ以上，授業実習予定科目以外の授業を対象として実習の前後に行い，レポートを提出），④授業実習（２コマ以上：実際に社会学部の学部生向けに授業を実施，授業担当教員の承諾のもと，助言を受けながら指導案作成，参加者同士でのピアレビューを推奨，実習日誌をまとめ，ふり返りを行う），⑤講習会Ｂ（集中講義：実践のふり返り，連続した授業体系の設計，成績評価，授業評価）
実績	2015年度のTF研修会には143名が出席		2015年度までの修了生（ディプロマ取得者）は60名
単位認定	（採用条件には指定する授業の単位取得が必要）		大学院研究科共通科目「教育技法の実践」として履修登録した場合は２単位認定（履修登録は必須ではない）
修了証	あり		あり

いる．また，学生自身にとっても，自らの教育力を高め，将来，大学教員及び研究者としての重要なキャリアとして位置づけられるとしている（筑波大学 システム情報工学研究科運営委員会，2010）．2008年度からTF制度を導入した人間総合科学研究科は，TFの採用条件の一つとして，研究科が実施するFDプログラムへの参加を求めている（筑波大学 教養教育機構，2011；筑波大学大学院，2015）．

一橋大学では，2006年度から教育研究職志望の社会学研究科博士後期課程の大学院生のうち原則的にTA経験者を対象として，学部学生に対する教育技能の習得を目的とした「ティーチングフェロープログラム」を開設している．当初は文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」による事業であったが，プロジェクト終了後も社会学研究科独自の大学院教育の一環として維持されている．本コースは，事前講習・授業観察・授業実習・事後講習の４段階からなり，修了者には社会学研究科より「TFディプロマ」が授与される．最短では１年で修了可能であるが，複数の年度にまたがっての参加も可能である（一橋大学，2015）．

4.4　学会によるプレFDの事例

これら大学以外に，学会によるプレFDの事例も報告されている．小林ら（2012）は，従来，大学の体育教員は体育系の大学院を修了し，体育学と教育学の知識を持ち，教育実習を経験していたのに対し，近年は保健体育の教員免許状を取得していない大学院生が４割にのぼる現状を明らかにし，大学体育の充実にはプレFDが必要であると指摘している．これを受け，日本体育学会では年次大会において院生セミナーを開催するとともに，教養体育インターンシップを試行している．また，プレFDのためのeラーニング教材も公開している（小林，2014）．

5．東北大学における取組み

4.2で概観した通り，東北大学のTohoku U. PFFPは課外プログラム型の取組みに位置付けられる．ここで，その概要と特色，これまでの成果をまとめる．

5.1　Tohoku U. PFFPの概要

Tohoku U. PFFPは，現在の大学院教育が研究能力の訓練を重視し，教育能力やその他大学教員に必要とされる能力を育成する機会を必ずしも有していない現状に対し，これから教員を目指そうとする大学院生やポスドクらが，大学教員という仕事を理解し，研究能力とともに基礎的な教育能力を備えた大学教員としてスムーズにキャリアをスタートするための下地作りの場の提供を目的としている（東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015）．

先進的な取組みを行っている米国や豪州を対象とした調査や，現地への参加者派遣を行いながら，必要なコンテンツの洗い出しを行い，徐々にプログラムの国内化を進めてきた（東北大学 高等教育開発推進センター，2014；東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015）。

Tohoku U. PFFPの目標は以下の通りである．

・生涯にわたり専門性を高めるために，効果的な省察ができるようになる
・大学教員の役割，仕事を理解し，展望を持ってキャリアを設計できる
・教育活動に関する基礎的知識を身につけ，自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
・異分野の研究や教育文化を知る

本プログラムでは，今後の継続的な専門性開発につなげていけるよう，初期キャリアにいる段階で図１に示す機会のそれぞれに触れておくことが重要であると考えている．具体的には，表５に示す活動により構成されている（東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015）．2015年度のプログラムは，７月に開始され，翌３月までの９か月間をかけて提供されている。

また，これまでの実践の結果，大学教員を目指す大学院生と新任教員とが，ともに学びあう環境が互いの教育観の醸成やロールモデルの獲得に効果的であることがわかったため，新任教員向けのプログラムであるTohoku U. NFP（Tohoku University, New Faculty Program）と合同で実施している．

図１　Tohoku U. PFFPのコンセプト

5.2　Tohoku U. PFFPの特色

Tohoku U. PFFP独自の特色として，（１）先達教員制度，（２）実授業の参観と教員とのディスカッション，（３）リフレクティブ・ジャーナルの執筆が挙げられる。

（１）先達教員制度：先達教員とは経験豊かな先輩教員のことを指し，プログラム参加者に助言やアドバイスを提供する役目を担う．先達教員は，授業公開への協力，模擬授業におけるフィードバックの提供，先達コンサルテーション等を通して参加者と交流し，自身の実体験を語ることで，参加者が多様な視点で教育を言語化できるよう支援を行う．先達教員は，高度教養教育･学生支援機構に所属する教員から募るとともに，学内の教育賞受賞者，プログラムOB/OGからの適任者の推薦をもとに，８名程度に依頼をしている．この先達教員制度を通して，参加者が，大学を構成する多様な専門分野の教員の知恵や工夫，経験について話し合い，大学という組織や大学教員としての在り方に対する理解を深めることを期待している．

（２）実授業の参観と教員とのディスカッション：先達教員や学内外の教育賞受賞教員等に依頼し，実際の授業を公開してもらい，この参観と参観後のディスカッションを実施している．参加者は３件以上の授業

表５　2015年度のTohoku U. PFFPの内容

活動名	内容	時間／頻度
オリエンテーション	参加者顔合わせ，プログラムの目的，大学教育の課題と教員の役割に関する講義，比較教育学の視点を組み入れたワークショップ，本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など	１日
授業デザインとシラバス作成	大学の授業における目標・活動・評価について，事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える	４時間
教授＝学習に関するセミナー	認知科学の側面から，人間の情報処理や理解に関する理論やモデルを学び，授業や学習のデザインに活かせる知見を得る	３時間×２回
授業参観	授業経験豊かな教員の授業を参観し，授業後のディスカッションを通して，教育活動について考えるヒントを得る	１人当たり最低３つの授業
マイクロティーチング	一人７分間のティーチングの実践とファシリテーター，他の参加者からのフィードバック，および授業リフレクションの実施	半日
模擬授業	一人17分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック，および授業リフレクションの実施	半日
研究指導法に関するセミナー	研究室運営や，学生を対象とした研究指導に関する手法や留意点をコーチングの技法を通して学ぶ	半日
諸外国の高等教育を知る	アメリカの高等教育について学び，海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションを通して，日本の高等教育との比較を行う	半日
国内他大学訪問調査	国内の他大学（主に私立大学）を訪問し，キャンパス見学や授業参観を行い，学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	３日間
海外他大学訪問調査	海外の大学（カリフォルニア大学バークレー校）にて，キャンパス見学や授業参観を行い，学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	５日間
先達教員による 個人コンサルテーション	先達教員（経験豊富な先輩教員）による個人コンサルテーションとグループディスカッション	半日
リフレクティブ・ジャーナルの作成	各セミナー後に自身の学びをふり返り，これまでの自身の経験や価値観と結び付けながら教育観を言語化する	各セミナー後，毎回
課題論文	「学生にとって，大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また，そういった学習経験を実現するために，大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」というテーマで執筆する	最後に提出
成果報告会	プログラムで学んだことを発表し，OB/OGや先達らとの質疑応答を行い，総括する	３時間

を参観し，授業運営上の課題や工夫している点などについて直接教員に質問することができる．実授業における学生の様子や反応をはじめとし，現職教員がどのように授業運営に取り組んでいるのかについて実際に見て感じられる機会が得られるため，教授法の観察だけではなく，学生理解や他の教員の教育観や信念などを理解することが期待できる。

（３）リフレクティブ・ジャーナルの執筆：プログラムを通して，大学教員という仕事や大学教員に関する自身の考え方がどのように発展していったのかを記録し，自分なりの教育観を言語化するために，各セミナーやワークショップ後にはリフレクティブ・ジャーナルを書き，３日以内に提出することを課している．これらの取り組みにより，プログラム修了後にも学び続けることのできる教員としての下地づくりを意図している．

5.3　Tohoku U. PFFPの成果

2010～2014年度までのプログラム修了生（新任教員プログラムの修了生は含まない）は，５年間で47名であり，所属は13研究科等にわたる。各年度の参加者の構成と所属をそれぞれ表６，７に示す．

参加者によるプログラムの評価は，４件法で平均が3.8を上回るなど，総じて高い（東北大学 高等教育開発推進センター，2012，2013，2014；東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015）。また，「知識だけな

表６　Tohoku U. PFFP修了者の構成

年度	D1	D2	D3	OD	PD	合計
2010	2	3	7	1	0	13（男７：女６） うち留学生８
2011	4	5	4	1	1	15（男９：女６） うち留学生５
2012	－	4	2	0	0	６（男２：女４） うち留学生３
2013	－	4	3	0	2	９（男３：女６） うち留学生３
2014	－	1	3	0	0	４（男２：女２） うち留学生０

表７　Tohoku U. PFFP修了者の所属

	2010	2011	2012	2013	2014	計
文学研究科		3	1	5		9
教育学研究科		1	1	1		3
法学研究科				1	1	2
経済学研究科	1		1	1		3
医学系研究科	6	2				8
医工学研究科					1	1
薬学研究科		1				1
工学研究科		2				2
農学研究科			1			1
国際文化研究科	5	4	1		1	11
情報科学研究科		2	1			3
環境科学研究科	1				1	2
東北アジア研究センター				1		1
計	13	15	6	9	4	47

らば自分で本などを読めばよいが，実際自分が書いたものや行ったことに対して意見を頂けることはこのプログラムならではだと思う」という評価が寄せられており，単なる知識提供ではなく，実践の場や教育観の言語化といった機会が提供できていることがわかる。さらに，プログラムの最後に提出する課題論文では，これまでは研究を続けるための選択肢の一つとして受動的かつ消極的に大学教員という職を志望していたが，プログラムを受講して，大学教員という仕事について知識や理解を深め，これまでの自分の経験を振り返ったり，短時間ながら授業を構想することにやりがいを見出したりする中で，研究者としてだけではなく，教育者としての大学教員像を現実味のある形で思い描くようになった自分への気づきについての記述（2014年度参加者）もみうけられた（東北大学 高度教養教育・学生支援機構，2015）。各種活動を通して，参加者が大学教員という仕事に対する理解を深め，自身の教育観を明らかにしていく過程を経験できていることが推察される。

加えて先達教員らも，「自分自身の勉強にもなった」，「勢いのある人たちの話を聞いて，こちらが元気づけられるようだった」，「参加者の皆さんと考えを交換する中で，私自身も考えを改める部分や新たに発見する部分もあり，参加してよかった」，「授業見学は自分の授業にフィードバックがもらえる貴重な機会なので，続けて欲しい」との評価が寄せられている。これらの声からは，先達教員らが参加者を支援するというだけでなく，先達教員自身も自分の教育観を見直したり，言語化する機会を得られること，自分の教育や研究への動機づけになるような活力が得られるなど，相互的な効果もあることが伺える。

Tohoku U. PFFPの参加者は，2014年度までの５年間で約50名程度と，東北大学に在籍する大学院生の総数から見れば決して多いとは言えない。カリフォルニア大学バークレー校での研修をメインとした５日間程度の内容であった2010年度と比較し，年を追ってプログラムの内容が拡充され，そのボリュームも大きくなってきたことから，気軽に短時間で参加できるようなプログラムではなくなったといえる。

しかし，少人数である分きめ細やかな対応が可能となっており，参加者の満足度や目標達成度においてある程度の質を保つことができている。実際に，プログラム修了生が作成したシラバスに感銘を受けたという報告や，修了生自身が就職後にカリキュラムマネジメントや教育改善について積極的に意見を出している，または，これらを担う役職[3]に就いたという報告が複数届いている。修了生がそれぞれの所属先において，プログラムでの学びの成果を発揮して仕事に取り組むことで，その周りの大学院生や教員らにも波及効果があるものと期待される。さらに，自主的な同窓生活動や，プログラム修了後にも各種専門性開発プログラムに積極的に参加し，ブラッシュアップを図る様子も観察されており，継続的かつ組織的な専門性開発の実現につながっていると評価できる．

6．今後の課題

第４章で概観したように，各大学における取組みは多様であるが，比較的新しい取組みであるプレFDは，その体系化や評価，研究成果の蓄積が未だ十分とはいえない状況にある．プレFDで何をどこまで扱うのか，といった議論の必要性（田口，2010，2014：田中ら，2014）や，専門性基準枠組みの共有や認証などの仕組みの必要性（沖，2015）も指摘されている．加えて，入職後の教員生活を経ての評価など，長期的視野による効果測定を行っていくことも必要である（東北大学高度教養教育・学生支援機構，2015）．

一方，大学教育学会などでは，プレFDの課題や知見の共有をはかろうとする動きがある．2015年の大学教育学会大会では，北海道大学，東北大学，東京大学，名古屋大学，大阪大学のプレFD主催者らによるラウンドテーブルがひらかれ，対象の拡大，認知度の向上，教員の協力，カリキュラム，人的資源，TA制度との連携，プレFD推進のための研究が課題として挙げられた（栗田ら，2015）．

また，東北大学は2011年から３年間にわたり，プレFDに関する研究会を開催している（東北大学高等教育開発推進センター，2012；2013；2014）．2013年に北海道大学，東北大学，一橋大学，京都大学，立命館大学，広島大学の共催で開催された「大学教員を目指す大学院生の全国交流会」では，プレFDの主催者だけではなく経験者（プログラム修了生）らも集い，取組みに対する評価や提案を行った．参加したプログラム修了生らからは，「自大学や協力校で実授業の１コマを体験する活動はぜひ実施してみたい」，「他の参加者との交流は有効．プログラム修了後も維持できる仕組みが欲しい」，「プレFD自体の認知度が低い．もっと多くの参加者を募ってほしい」，「修了証が役立つように周知や権威づけの方策を考えてほしい」という声が寄せられた（東北大学高等教育開発推進センター，2014）．

Tohoku U. PFFPの参加者からも，プログラムの学内での認知の低さから，「プログラム参加のために研究室を出てくるときに肩身が狭い」，「まずは部局や教員らへの広報に尽力して欲しい」という声が寄せられている．将来の大学教員としてのキャリアにのために積極的に学ぼうとしている大学院生が，よりよい環境でプログラムを受講できるよう，組織内での認識に対しても働きかけが必要であるといえる．

全国的なムーブメントの後，各大学においてそれぞれに取組みが継続されている米国においても，日本と同様に，TA制度型，課外プログラム型，そして，大学院のコースやCertificateプログラムとしての展開がなされている．必ずしも大学教員を目指す大学院生のすべてがそうしたプログラムを受講するような状況ではないが，必要を感じた時に手を伸ばせば届く場所に，そうしたキャリア支援が提供されている環境は理想的だといえる．

各国，各大学で取組まれている多様な実践の知見や成果の共有を行い，こうしたプログラムの受講により，若手の大学教員がいきいきと初期キャリアを邁進できるような環境の実現が期待される．

注

（１）各表は，本文中に示した各事例の参考文献，栗田ら（2015），および適宜，実施主体へのメール・電話による取材で得られた情報を統合して作成した．2015年時点の取組みに関する情報である．空欄は，公表されておらず取材でも確認が取れなかった事項である．

（２）教育関係共同利用拠点とは，質の高い教育を提供していくために，各大学の有する人的・物的資源の共同利用等の有効活用を推進することにより，大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開していくための制度である（文部科学省 2009）．

（３）例えば，所属大学が文部科学省の「大学教育再生加速プログラム」の事業として実施している，特定の教授手法の効果測定の担当者など．

謝辞

情報提供にご協力いただきました各大学のプログラム担当者の方々に深く御礼申し上げます．本研究の一部は科研費（20612013）の助成によります．

参考文献

半澤礼之，田口真奈，田川千尋，松下佳代（2011）「学習者の多様性に基づく授業のリフレクション」『京都大

学高等教育研究』17:123-133.
林素子，沖裕貴，松村初（2013）「立命館大学におけるPFFの取り組み」『立命館高等教育研究』13:169-186.
羽田貴史（2008）「広島大学におけるアカデミック・キャリアゼミの試み」『大学院博士課程における大学教員の養成機能形成に関する日米仏比較研究（研究代表者 夏目達也）』19-14.
平岡斉士，小林雄志，喜多敏博，都竹茂樹，鈴木克明（2014）「ID教育の観点からの日本のプレFDの課題と改善策」『日本教育工学会第30回全国大会講演論文集』621-622.
広島大学（2015）「教職課程担当教員養成プログラム」http://home.hiroshima-u.ac.jp/kyo2/Ed.Dprogram/（2015年７月30日確認）
一橋大学（2015）「一橋大学 大学院生向けキャリア支援ティーチングフェロー・トレーニング・コース」https://sites.google.com/a/r.hit-u.ac.jp/careersupport/academic/tfcourse（2015年７月30日確認）
北海道大学（2015）「大学院理工系専門基礎科目　平成27年度開講科目一覧」http://www.hokudai.ac.jp/gakusei/instruction-info/gclass-rikoukei/H27_BGST_list.pdf（2015年７月30日確認）
北海道大学 高等教育推進機構（2015a）「2014年度UCバークレーの講師による「大学院生のための大学教員養成（Preparing Future Faculty）講座：ティーチングとライティングの基礎」http://socyo.high.hokudai.ac.jp/PFF2015/PFF2015jp.pdf（2015年７月30日確認）
北海道大学 高等教育推進機構（2015b）「平成26年度『北海道大学TF研修会』を開催」『北海道大学 高等教育推進機構 ニュースレター』102:11-12.
細川敏幸（2015）「北海道大学におけるTA／TF研修会およびPFFの取組」大学教育学会第37回（2015年）大会，ラウンドテーブル12「プレFDの現状からみえる課題と目指すべき方向性」当日配布資料.
飯吉弘子（2015）「大阪市立大学文学研究科『大学教育実習制度』3年間の実践と課題―振り返りワークシートの開発と振り返り結果からの考察―」『大学教育』12（２）:27-35.
北村昌志，米岡大輔（2012）「将来の大学教師としてのスキル向上を目指して―大阪市立大学文学研究科の『大学教育実習制度』(2011年度導入）における挑戦―」『大学教育』10（１）:23-30.
小林勝法，木内敦詞，嵯峨寿，奈良雅之（2012）「体育学専攻の大学院生を対象とした大学教員準備教育に関する調査」『大学体育学』9:109-116.
小林勝法（2014）「プレFDと教養体育インターンシップ，キャリア形成支援の取り組み」『日本体育学会大会予稿集』65:12.
京都大学（2015a）「平成27年度研究科横断型教育プログラム」http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/cross/2015（2015年７月30日確認）
京都大学（2015b）「平成27年度研究科横断型教育プログラムシラバス」http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/cross/2015/documents/syllabus_150507.pdf（2015年７月30日確認）
京都大学（2015c）「平成27年度研究科横断型教育プログラム（Aタイプ）授業科目A-42」http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/cross/2015/documents/a_42.pdf（2015年７月30日 確認）
京都大学 高等教育研究開発推進センター（2015）「京都大学のプレFD ウェブサイト」http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/（2015年７月30日確認）
栗田佳代子ら（2015）「各大学で実施されているプレFDプログラム」大学教育学会第37回（2015年）大会，ラウンドテーブル12「プレFDの現状からみえる課題と目指すべき方向性」当日配布資料.
丸山恭司(2012)「教職課程担当教員養成プログラムの評価」『平成23年度採択 広島大学特別事業経費（全学裁量経費）Ed.D型大学院プログラム支援 教育・研究活動報告書 これからの大学教員養成の話をしよう』32-33.
三上雅子（2012）「大学教育授業実習制度について―プレFDの試み―」『大学教育』９（2）:61-65.
文部科学省（2009）「教育関係共同利用拠点制度について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/__icsFiles/afieldfile/2009/11/24/1287149_001.pdf（2015年７月30日確認）

森下真実（2014）「平成25年度『教育課程担当教員養成プログラム』教育・研究活動報告」『平成25年度 教職課程担当教員養成プログラム報告書 先生を育てる 先生として育つ－教職課程担当教員養成プログラムの実証的研究－』1-2.

名古屋大学 高等教育研究センター（2015）「名古屋大学 高等教育研究センター ウェブサイト」http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/index.html（2015年７月30日確認）

夏目達也（2011）「大学教育の質保証方策としてのFDの可能性―FDの新たな展開の諸相―」『名古屋高等教育研究』11:133-152.

根岸千悠，大山牧子，家島明彦，森秀樹，佐藤浩章（2014）「大学院生による模擬授業評価のためのルーブリック作成の試み－『大阪大学未来の大学教員養成プログラム』の実践から－」『日本教育工学会第30回大会講演論文集』631-632.

沖裕貴（2015）「実践的FDプログラムの開発・活用の経緯と今後の課題」『立命館高等教育研究』15:1-16.

大阪大学 教育学習支援センター（2015）「大阪大学 教育学習支援センター ウェブサイト」http://www.tlsc.osaka-u.ac.jp（2015年７月30日確認）

大阪大学 全学教育推進機構（2015）「大阪大学 大学院副専攻プログラム 大学院等高度副プログラム」http://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/fukusenkou/files/H27.pdf（2015年７月30日確認）

大山牧子，田口真奈（2011）「公開授業・検討会が大学初任教員のリフレクションに与える影響－京都大学文学研究科プレFDプロジェクトを対象に－」『日本教育工学会第27回大会講演論文集』835-836.

立命館大学 大学院キャリアパス推進室（2015）「Preparing Future Faculty」http://www.ritsumei.ac.jp/ru_gr/g-career/program/list/article.html/?id=67（2015年７月30日確認）

境愛一郎，山口祐毅，張磊，久恒拓也（2014）「教職課程担当教員養成プログラムのめざすもの：プレFDプログラムとしての独自性と課題」『平成25年度 教職課程担当教員養成プログラム報告書 先生を育てる 先生として育つ－教職課程担当教員養成プログラムの実証的研究－』19-34.

佐藤浩章（2015）「授業参観・模擬授業をどのように実施するか～大阪大学FFPの取組～」大学教育学会第37回（2015年）大会，ラウンドテーブル12「プレFDの現状からみえる課題と目指すべき方向性」当日配布資料.

田口真奈，出口康夫，赤嶺宏介，半澤礼之，松下佳代（2010）「未来のファカルティをどう育てるか―京都大学文学研究科プレFDプロジェクトの試みを通じて―」『京都大学高等教育研究』16:91-111.

田口真奈，松下佳代，半澤礼之（2011）「大学授業における教授のデザインとリフレクションのためのワークシートの開発」『日本教育工学会論文誌』35(3):269-277.

田口真奈（2012）「第６章 大学教育改革と授業研究」『日本教育工学選書６，授業研究と教育工学』123-168，ミネルヴァ書房.

田口真奈，出口康夫，東京大学高等教育研究開発推進センター編著（2013）『未来の大学教員を育てる 京大文学部・プレFDの挑戦』勁草書房.

田口真奈，田中一孝，畑野快（2014）「段階別にみたプレFDの特徴とその目的」『高等教育学会第17回大会発表論文集』148-149.

田中一孝，畑野快，田口真奈（2014）「プレFDを通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得―京都大学文学研究科プレFDプロジェクトを対象に―」『京都大学高等教育研究』20:81-88.

東北大学 大学教育支援センター（2015）「東北大学 大学教育支援センター ウェブサイト」http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/（2015年７月30日確認）

東北大学 高度教養養育・学生支援機構（2015）『2014年度 東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム報告書』

東北大学 高等教育開発推進センター（2012）『2011年度 東北大学 大学教員準備プログラム報告書』

東北大学 高等教育開発推進センター（2013）『2012年度 東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム報告書』

東北大学 高等教育開発推進センター（2014）『2013年度東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム報告書』

東京大学（2015a）「東大FD ウェブサイト」http://www.todaifd.com/vision/（2015年７月30日確認）

東京大学（2015b）「東京大学フューチャーファカルティプログラムシラバス（第５期版）」http://www.todaifd.com/wp/wp-content/themes/twentyeleven/ffp/2015_syllabus_sum.pdf（2015年７月30日確認）

筑波大学（2014）「PFP人文社会科学のためのキャリアデザインプログラム」http://pfp.hass.tsukuba.ac.jp/PFP_2014web.pdf（2015年７月30日確認）

筑波大学（2015）「大学院共通科目シラバス　教育・研究指導Ⅲ（職業としての大学教育）」https://www.tsukuba.ac.jp/education/g-courses/detail.php?subject_id=789（2015年７月30日確認）

筑波大学大学院（2015）「筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ファカルティ・ディベロップメント」http://www.chs.tsukuba.ac.jp/category/faculty_development（2015年７月30日確認）

筑波大学 教養教育機構（2011）「筑波大学 TAハンドブック」http://www.ole.tsukuba.ac.jp/sites/default/files/ta-hanndobukku.pdf（2015年７月30日確認）

筑波大学 システム情報工学研究科運営委員（2010）「システム情報工学研究科におけるティーチング・フェロー（TF）制度の実施に関する取扱い」http://private.sie.tsukuba.ac.jp/pub-student/05education-info/kyomu/1-TFtoriatsukai-H25.pdf（2015年７月30日確認）